

No_4 (2002,1,12) Incidence of Carotid Stenosis in Nasopharyngeal Carcinoma Patients after Radiotherapy.

Lam WW et al.
Cancer 92(9):2357-63, 2001.

頭頸部癌は放射線治療で根治が可能のため、放射線療法では極めて重要な疾患である。頭頸部腫瘍の放射線治療を受けた患者は、脳梗塞の発生頻度が高いことが指摘されている。本論文は上咽頭癌放射線治療後の副作用の1つとして、頸動脈の狭窄を検討したものである。上咽頭癌で放射線治療を受けた71例と未治療の51例の頸動脈を、color Doppler で検索した。検査時期は治療後4-20年の間である。治療群は71例中56例(79%)に、未治療群は51例中11例(22%)に頸動脈の狭窄を認めた。50%以上の狭窄は放射線治療後群のみにみられ、21例(30%)に発生した。狭窄部位は総頸動脈から内頸動脈が圧倒的に多かった。Color Doppler で簡単に検査できるため、頭頸部を照射した患者の follow-up 項目の1つとして、検討すべき課題と思われる。(伊東久夫)

No_5 (2002,1,19) Method and Timing of Tumor Volume Measurement for Outcome Prediction in Cervical Cancer Using Magnetic Resonance Imaging.

Mayr NA et al.
Int J Radiat Oncol Biol Phys 52(1):14-22, 2002.

子宮頸癌は放射線治療後の腫瘍縮小から予後が推定される疾患の1つである。従来、放射線治療による腫瘍の縮小は、触診所見から臨床的に判断されてきた。最近ではMRIが導入され、治療効果判定に用いられるようになった。MRIによる効果判定を行う場合、どのような時期に、どのような検査が有用なのかが問題となる。本論文は、治療前の腫瘍サイズ、20-25 Gy 照射時、45-40 Gy 照射時、治療終了後1-2カ月にMRIを撮像した。腫瘍容積は腫瘍の縦・横・高さの3方向を計測し、楕円形として容積する方法と、スライス毎に腫瘍をROIで囲って容積を積算する方法を比較している。腫瘍の縮小は残存腫瘍が0%、20%以下、50%以下、80%以下に分けて検討した。治療効果は局所制御、無病生存率、全生存率を用いた。結論として、(1)予後を反映する検査時期は、45-50Gy 終了時となった。(2)この時期に20%以下まで腫瘍が退縮した症例は、極めて予後良好であった。(3)腫瘍容積はスライス毎にROIを囲って算出する方法が推奨されている。MRIで腫瘍の治療効果を判定する場合、極めて示唆に富む論文と思われる。(伊東久夫)

No_6 (2002,1,26) Prognosis of Patients with Advanced Carcinoma of the Esophagus with Complete Response to Chemotherapy and/or Radiation Therapy: a Questionnaire Survey in Japan

Aoyama N et al
Int J Clin Oncol 6(3):132-137, 2001.

進行食道癌(II-IV期/M1を除く)症例で、放射線治療、化学療法、両者の併用が行われた結果、臨床的に1年以上CRを持続している症例(A群)または術後病理組織学的にCRと判定された症例(B群)の予後について、日本食道疾患研究会に属する施設を対象にアンケート調査が実施された。そして、1990年から1997年の間に治療され、上記の条件を満たす症例169例が登録された。このうちA群は106例、B群は63例であった。両群とも化学療法は5FUとCDDPの併用が多数例を占めた。放射線治療の詳細は不明であるが総線量の平均は、A群63Gy、B群術前39Gyであった。

分析の結果、1)5年生存率はA群62.4%、B群64.8%で両群間に有意差はなかった。さらに、各群とも治療開始時の病期間にも差異は認められなかった。2)A群では、同時化学放射線治療の成績が有意に良好であった。3)再発率はA群18.7%、B群20%であった。なお、A群では初回再発部位は原発巣(7.7%)が多かった。3)B群では、術後1年以内に死亡した12例中6例の死因は術後合併症であった。

以上より、進行食道癌では臨床病期の如何に関わらず、放射線治療や化学療法でCRと判定された場合には治癒の期待が高くなる。なお、A群では局所制御の重要性が指摘されたが、CRと判定された場合の手術適応については今後の検討課題と考えられた。(岡崎 篤)

